

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	山根 嵩史
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
記憶課題における学習容易性判断に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	中條 和光	
審査委員	教授	宮谷 真人	
審査委員	教授	湯澤 正通	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、心理学実験における典型的な記憶課題を対象として、学習前段階のメタ認知モニタリング（学習容易性判断 Ease of Learning judgments: EOL 判断）のメカニズムを検討したものである。本論文で検証された仮説は、Koriat (1997)がメタ認知モニタリングに関して提唱した、記憶課題遂行の制御は処理段階に応じて、また各段階の処理の進行に応じて利用可能な様々な手がかりのモニタリングを通して行われる、という手がかり利用アプローチに基づくものである。Koriat (1997)は、記銘方法の選択や記銘時間の割当、処理の打ち切りなどの学習段階の制御のための情報を得るメタ認知モニタリング（学習判断と呼ばれる）を対象に、手がかり利用の観点から、利用される手がかりや学習の進行に伴う手がかりやその利用の変化などを明らかにし、それによってモニタリングの内的過程を解明する上での同アプローチの有効性を示した。しかし、Koriat(1997)による検証は学習判断にとどまり、その後の同アプローチによる研究は停滞していた。この論文は、判断に伴う偶発的な符号化促進という新たな指標を開発し、同アプローチの観点から、これまで検証されてこなかった EOL 判断のメカニズムを検討するものである。</p> <p>本論文は3章で構成されている。</p> <p>第1章「記憶課題遂行のメタ認知研究の概要と本研究の目的」では、先行研究に基づいて、メタ認知の研究が、もっぱら記憶課題を用いたメタ記憶研究として行われてきていることを述べ、その上で、近年のメタ記憶研究が Nelson & Narens (1990)の記憶課題遂行におけるモニタリング活動とコントロール活動のモデルを枠組みとしていることを指摘した。しかし、同モデルは活動のタイミングを示しているものの、それぞれの内的過程には言及していない。その一方、Koriat(1997)は、手がかり利用の観点から、学習段階のモニタリング（学習判断）の内的過程を明らかにしているが、実証的な検証は学習段階にのみとどまっていることを指摘した。これらを踏まえて、手がかり利用アプローチが課題遂行の全段階を研究する枠組みとなることを述べ、同アプローチの観点から、これまで研究のない学習前段階に行われる EOL 判断のメカニズムを実証するという問題を設定した。</p> <p>第2章「手がかり利用アプローチによる記銘前段階のメタ認知的モニタリングの過程の</p>			

検討」では、第1章で提示した問題について、第1節から第3節で、偶発学習パラダイムを用いた検証を行っている。さらに、第4節では重回帰分析を用いてEOL判断における手がかり利用を支えるメタ認知的知識について検討している。

第1節「学習容易性判断の符号化促進効果の検討（実験1）」では、利用可能な手がかりを検索し、それに基づいた判断を行うことによって生じる偶発的精緻化による符号化促進を指標とし、EOL判断において、学習前段階において利用可能な手がかりに基づく判断が行われていることを実証した。第2節「学習容易性判断に用いられる手がかりの検討（実験2）」では、実験1の内省報告からEOL判断で利用される手がかりを推定し、それらの手がかりに関する判断を行う条件とEOL判断との間で記憶成績を比較し、EOL判断で項目のイメージ価や主観的使用頻度のような内在的手がかりが利用されることを実証した。第3節「意図学習における学習容易性判断の符号化促進効果（実験3）」では、実験1、2の結果がEOL判断によるものではなく、EOL判断を求める教示によって喚起された記憶意図によるという可能性を排除する実験を行い、実験1、2の結論の妥当性を確認した。第4節「重回帰分析を用いた学習容易性判断に用いられるメタ認知的知識の検討（実験4）」では、実験2で確認された手がかりについて、その利用の実態を重回帰分析によって調べ、EOL判断における手がかりの重み付けを明らかにした。

第3章「総合考察」では、第2章の知見をまとめた上で、手がかり利用の観点からEOL判断のメカニズムが実証できたことにより、手がかり利用アプローチを枠組みとして記憶課題全段階のモニタリングを包括的に記述することが可能となると考察している。

本論文は、学習前段階でのモニタリングであるEOL判断について、手がかり利用アプローチの観点から判断の内的過程を初めて実証した。本研究の扱う対象は、記憶課題を用いながらも記憶メカニズムではなく、課題遂行の制御過程である。行動の獲得や変容を扱う学習心理学において、意図的な行動の獲得、変容はメタ認知的な制御の獲得、変容として説明可能である。したがって、本研究は、人の意図的な学習過程を研究する上で、新たな研究の枠組みを提示するものと言える。

以上から、本論文は次の3点で高く評価できる。

- (1) 手がかりの検索とそれに基づく判断によって生じる偶発的精緻化による符号化促進を指標とするEOL判断過程解明の新たな手続きを開発し、EOL判断が学習前段階において利用可能な内在的がかりに基づいて行われていることを初めて実証した点。
- (2) EOL判断に関して手がかり利用アプローチの観点から具体的に検証し、記憶課題の遂行過程全般を手がかり利用アプローチによって説明可能であることを示した点。
- (3) メタ認知的モニタリングの共通基盤として手がかり利用アプローチで仮定されたメカニズムの妥当性を示し、認知課題の遂行に関して、メタ認知的モニタリングによる意図的な制御のメカニズムを解明するという新たな研究課題を提示した点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年2月3日